

土神ときつね

宮沢賢治

青空文庫

(一)

一本木の野原の、北のはずれに、少し高く盛りあがった所がありました。いのころぐさがいっぱいに生え、そのまん中には一本の綺麗な女の樺の木がありました。

それはそんなに大きくはありませんでしたが幹はてかてか黒く光り、枝は美しく伸びて、五月には白い花を雲のようにつけ、秋は黄金や紅やいろいろの葉を降らせました。

ですから渡り鳥のかっこうや百舌も、又小さなみそさざいや目白もみんなこの木に停まりました。ただもしも若い鷹などが来ているときは小さな鳥は遠くからそれを見付けて決して近くへ寄りませんでした。

この木に二人の友達がありました。一人は丁度、五百歩ばかり離れたぐちやぐちやの谷地の中に住んでいる土神で一人はいつも野原の南の方からやって来る茶いろの狐だったのです。

樺の木はどちらかと云えば狐の方が好きでした。なぜなら土神の方は神という名こそついてはいましたがごく乱暴で髪もぼろぼろの木綿糸の束のよう眼も赤くきものだってまる

でわかめに似、いつもはだしで爪も黒く長いのでした。ところが狐の方は大へんに上品な風で滅多に人を怒らせたり気にさわるようなことをしなかったのです。

ただもしよくよくこの二人をくらべて見たら土神の方は正直で狐は少し不正直だったかも知れません。

(二)

夏のはじめのある晩でした。樺には新らしい柔らかな葉がいつぱいについていいかおりがそこら中いっぱい、空にはもう天の川がしらしらと渡り星はいちめんふるえたりゆれたり灯つたり消えたりしていました。

その下を狐が詩集をもつて遊びに行つたのでした。仕立おろしの紺の背広を着、赤革の靴もキツキツと鳴つたのです。

「実にしずかな晩ですねえ。」

「ええ。」樺の木はそつと返事をしました。

「蝸ほしが向うを這っていますね。あの赤い大きなやつを昔は支那では火と云ったんです

よ。」

「火星とはちがうんでしょうか。」

「火星とはちがいますよ。火星は惑星わくせいですね、ところがあいつは立派な恒星こうせいなんです。」

「惑星、恒星ってどういうんですの。」

「惑星というのはですね、自分で光らないやつです。つまりほかから光を受けてやつと光るように見えるんです。恒星の方は自分で光るやつなんです。お日さまなんかは勿論もちろん恒星ですね。あんなに大きくてまぶしいんですがもし途方とほうもない遠くから見たらやつぱり小さな星に見えるんでしょうね。」

「まあ、お日さまも星のうちだったんですわね。そうして見ると空にはずいぶん沢山たくさんのお日さまが、あら、お星さまが、あらやつぱり変だわ、お日さまがあるんですね。」

狐は鷹揚おうように笑いました。

「まあそうです。」

「お星さまにはどうしてああ赤いのや黄のや緑のやあるんでしょうね。」

狐は又鷹揚に笑って腕うでを高く組みました。詩集はぶらぶらしましたがなかなかそれで落

ちませんでした。

「星に^{だいたい}橙や青やいろいろある訳ですか。それは斯^こうです。全体星というもののははじめはぼんやりした雲のようなもんだったんです。いまの空にも沢山あります。たとえばアンドロメダにもオリオンにも^{りょうけんざ}獵犬座にもみんなあります。獵犬座のは渦^{うず}巻^まきです。それから環^り状^{じょう}星^{せい}雲^{うん}というのもあります。魚の口の形ですから^{フイッシュユマウスネビュラ}魚口星雲とも云いますね。そんなのが今の空にも沢山あるんです。」

「まあ、あたしいつか見たいわ。魚の口の形の星だなんてまあどんなに立派でしょう。」

「それは立派ですよ。^{ぼく}僕水沢の天文台で見ましたがね。」

「まあ、あたしも見たいわ。」

「見せてあげましょう。僕実は望遠鏡を^{ドイツ}独乙のツアイスに注文してあるんです。来年の春までには来ますから来たらすぐ見せてあげましょう。」狐は思わず斯う云ってしまいました。そしてすぐ考えたのです。ああ僕はたった一人のお友達にまた^{うそ}ついでを云ってしまいました。ああ僕はほんとうにだめなやつだ。けれども決して悪い気で云ったんじゃない。よろこばせようと思って云ったんだ。あとですっかり本当のことを云ってしまおう、狐はしばらくしんとしながら斯う考えていたのです。樺の木はそんなことも知らないでよろこん

で言いました。

「まあうれしい。あなた本当にいつでも親切だわ。」

狐は少し悄気しよげながら答えました。

「ええ、そして僕はあなたの為ためならばほかのどんなことでもやりますよ。この詩集、ごらんなさいませんか。ハイネという人ですよ。翻訳ほんやくですけれども仲々よくできてるんです。」

「まあ、お借りしていいんでしょうかしら。」

「構くいせんとも。どうかゆつくりごらんなすつて。じゃ僕もう失礼します。はてな、何か云い残したことがあるようだ。」

「お星さまのいろいろのことですわ。」

「ああそうそう、だけどそれは今度にしましょう。僕あんまり永くお邪魔じやましちやいけないから。」

「あら、いいですよ。」

「僕又来ますから、じゃさよなら。本はあげてきます。じゃ、さよなら。」狐はいそがしく帰って行きました。そして樺の木はその時吹ふいて来た南風にざわざわ葉を鳴らしながら

狐の置いて行つた詩集をとりあげて天の川やそらいちめんの星から来る微かなあかりにすかして頁ページを繰くりました。そのハイネの詩集にはロウレライやさまざま美しい歌がいっぱいにあつたのです。そして樺の木は一晩中よみ続けました。ただその野原の三時すぎ東から金きんぎゆうきゆう牛宮うみやうののぼるころ少しとろしただけでした。

夜があげました。太陽がのぼりました。

草には露つゆがきらめき花はみな力いっぱい咲きました。

その東北の方から熔とけた銅しるの汁をからだ中に被かぶつたように朝日をいっぱいかすに浴びて土神がゆっくりゆっくりやって来ました。いかにも分別くさそうに腕こまねを拱こまねきながらゆっくりゆつくりやって来たのでした。

樺の木は何だか少し困つたように思いながらそれでも青い葉をきらきらと動かして土神の来る方を向きました。その影かげは草に落ちてちらちらちらちらゆれました。土神はしずかにやって来て樺の木の前に立ちました。

「樺の木さん。お早う。」

「お早うございます。」

「わしはね、どうも考えて見るとわからんことが沢山ある、なかなかわからんことが多い

もんだね。」

「まあ、どんなことでございますの。」

「たとえばだね、草というものは黒い土から出るのだがなぜこう青いもんだらう。黄や白の花さえ咲くんのだ。どうもわからんねえ。」

「それは草の種子が青や白をもっているためではないでございましょうか。」

「そうだ。まあそう云えばそうだがそれでもやっぱりわからんな。たとえば秋のきのこのようなものは種子もなし全く土の中からばかり出て行くもんだ、それにもやっぱり赤や黄いろやいろいろある、わからんねえ。」

「狐さんにでも聞いて見ましたらいかがでございましょう。」

樺の木はうつとり昨夜の星の^{ゆうべ}はなしをおもっていましたのでつい斯^こう云ってしまいました。た。

この語^{ことば}を聞いて土神は俄^{にわ}かに顔いろを変えました。そしてこぶしを握^{にぎ}りました。

「何だ。狐？ 狐が何を云い居^おった。」

樺の木はおろおろ声になりました。

「何も仰^おつしやったんではございませんがちよとしたらご存知かと思われましたので。」

「狐なんぞに神が物を教わるとは一体何たることだ。えい。」

樺の木はもうすっかり恐^{こわ}くなつてぷりぷりぷりゆれました。土神は齒をきしきし嚙^かみながら高く腕を組んでそこらにあるきまわりしました。その影はまつ黒に草に落ち草も恐^{おそ}れて顫^{ふる}えたのです。

「狐^この如^{ごと}きは実に世の害悪だ。ただ一言もまことはなく卑^ひ怯^{きやう}で臆^{おく}病^{びやう}でそれに非常に妬^{ねた}み深いのだ。うぬ、畜^{ちく}生^{しょう}の分^{ぶん}際^{ざい}として。」

樺の木はやつと氣をとり直して云いました。

「もうあなたの方のお祭も近づきましたね。」

土神は少し顔色^{やわら}を和^{やわ}げました。

「そうじゃ。今日は五月三日、あと六日だ。」

土神はしばらく考えていましたが俄かに又声を暴^{あら}らげました。

「しかしながら人間どもは不^ふ届^{とど}だ。近^{ちか}頃^{ごろ}はわしの祭にも供^く物^{もつ}一つ持って来ん、おのれ、今度わしの領分に最初に足を入れたものはきつと泥^{どろ}の底に引き擦^ずり込^こんでやろう。」土神はまたきりきり齒嚙みしました。

樺の木は折^せ角^{かく}なだめようと思つて云つたことが又もや却^{かえ}つてこんなことになつたので

もうどうしたらいいかわからなくなりただちらちらとその葉を風にゆすつていました。土神は日光を受けてまるで燃えるようになりながら高く腕を組みキリキリ歯噛みをしてその辺をうろうろしていましたが考えれば考えるほど何もかもしやくにさわつて来るらしいのでした。そしてとうとうこらえ切れなくなつて、吠^ほえるようになって荒^{あら}々^{あら}しく自分の谷^や地^ちに帰つて行つたのでした。

(三)

土神の棲^すんでいる所は小さな競馬場ぐらいある、冷たい湿地^{しつち}で苔^{こけ}やからくさやみじかい蘆^{あし}などが生えていましたが又^{また}所々にはあざみやせいの低いひどくねじれた楊^{やなぎ}などもありました。

水がはじめじめしてその表面にはあちこち赤い鉄の澁^{しぶ}が湧^わきあがり見るからどろどろで気味も悪いのでした。

そのまん中の小さな島のようになつた所に丸太で拵^{こしら}えた高さ一間ばかりの土神の祠^{ほこら}があったのです。

土神はその島に帰つて来て祠の横に長々と寝そべりました。そして黒い瘡^{かさ}せた脚^{あし}をがりがり掻^かきました。土神は一羽の鳥が自分の頭の上をまつすぐに翔^かけて行くのを見ました。すぐ土神は起き直つて「しつ」と叫^{さけ}びました。鳥はびつくりしてよろよろと落ちそうになりそれからまるではねも何もしびれたようにだんだん低く落ちながら向うへ遁^にげて行きました。

土神は少し笑つて起きあがりました。けれども又すぐ向うの樺^{かば}の木^きの立っている高みの方を見るとはつと顔色を変えて棒立ちになりました。それからいかにもむしやくしやるという風にそのぼろぼろの髪毛^{かみけ}を両手で掻きむしっていました。

その時谷地の南の方から一人の木樵^{きせり}がやつて来ました。三つ森山の方へ稼^{かせ}ぎに出るらしく谷地のふちに沿つた細い路^{みち}を大股^{おおまた}に行くのでしたがやつぱり土神のことは知つていたと見えて時々気づかわしように土神の祠の方を見ていました。けれども木樵には土神の形は見えなかつたのです。

土神はそれを見るとよろこんでぱつと顔を熱^{ほて}らせました。それから右手をそつちへ突き出して左手でその右手の手首をつかみこつちへ引き寄せるようにしました。すると奇体^{きたい}なことは木樵はみちを歩いていると思ひながらだんだん谷地の中に踏み込んで来るようでした。

た。それからびっくりしたように足が早くなり顔も青ざめて口をあいて息をしました。土神は右手のこぶしをゆっくりぐるつとまわしました。すると木樵はだんだんぐるつと円くまわつて歩いていましたがいよいよひどく周章あわでだしてまるであはあはあはあしながら何べんも同じ所をまわり出しました。何でも早く谷地から遁はなげて出ようとするらしいのでしたがあせつてもあせつても同じ処ところを廻まわっているばかりなのです。とうとう木樵はおろろ泣き出しました。そして両手をあげて走り出したのです。土神はいかにも嬉うれしそうにやにやにやにや笑つて寝そべったままそれを見ていましたが間もなく木樵がすっかり逆上のぼせて疲つかれてばたつと水の中に倒たおれてしまいますと、ゆっくりと立ちあがりました。そしてぐちゃぐちゃ大股にそつちへ歩いて行つて倒れている木樵のからだを向うの草はらの方へぽんと投げ出しました。木樵は草の中にどしりと落ちてううんと云いながら少し動いたようでしたがまだ気がつきませんでした。

土神は大声に笑いました。その声はあやしい波になって空の方へ行きました。空へ行つた声はまもなくそつちからはねかえつてガサリと樺の木の外とにも落ちて行きました。樺の木ははつと顔いろを変えて日光に青くすきとおりせわしくせわしくふるえしました。

土神はたまらなそうに両手で髪を掻きむしりながらひとりで考えました。おれのこんな面白くないというのは第一は狐のためだ。狐のためよりは樺の木のためだ。狐と樺の木とのためだ。けれども樺の木の方はおれは怒つてはいないのだ。樺の木を怒らないためにおれはこんなにつらいのだ。樺の木さえどうでもよければ狐などはなおさらどうでもいいのだ。おれはいやしいけれどもとにかく神の分際だ。それに狐のことなどを気にかけるればならないというのは情ない。それでも気にかかるから仕方ない。樺の木のことなどは忘れてしまえ。ところがどうしても忘れられない。今朝は青ざめて顫えたぞ。あの立派だったこと、どうしても忘られない。おれはむしゃくしゃまぎれにあんなあわれな人間なぞをいじめたのだ。けれども仕方ない。誰だつてむしゃくしゃしたときは何をするかわからないのだ。

土神はひとりで切ながつてばたばたしました。空を又一正の鷹が翔けて行きましたが土神はこんどは何とも云わずだまつてそれを見ました。

ずうつとずうつと遠くで騎兵の演習らしいパチパチパチ塩のはぜるような鉄砲の音が聞えました。それから青びかりがどくと野原に流れて来しました。それを呑んだためかさっきの草の中に投げ出された木樵はやつと気がついておずおずと起きあがりしきり

にあたりを見廻しました。

それから俄かに立つて一目散に遁げ出しました。三つ森山の方へまるで一目散に遁げました。

土神はそれを見て又大きな声で笑いました。その声は又青ぞらの方まで行き途中から、バサリと樺の木の方へ落ちました。

樺の木は又はつと葉の色をかえ見えない位こまかくふるいました。

土神は自分のほこらのまわりをうろうろ何べんも歩きまわってからやつと気がしずまったと見えてすつと形を消し融けるようにほこらの中へ入って行きました。

(四)

八月のある霧きりのふかい晩でした。土神は何とも云えずさびしくてそれにむしゃくしゃして仕方がないのでふらつと自分の祠ほこらを出ました。足はいつの間にかあの樺の木の方へ向っていたのです。本当に土神は樺の木のことを考えるとなぜか胸がどきつとするのです。そして大へんに切なかつたのです。このごろは大へんに心持が變つてよくなっていたのです。

ですからなるべく狐のことなど樺の木のことなど考えたくないと思つたのでした。がどうしてもそれがおもえて仕方ありませんでした。おれはいやしくも神じゃないか、一本の樺の木がおれに何のあたひがあると毎日毎日土神は繰り返して自分で自分に教えました。それでもどうしてもかなしくて仕方なかつたのです。殊にちよつともあの狐のことを思い出したらまるでからだが灼けるくらい辛かつたのです。

土神はいろいろ深く考え込みながらだんだん樺の木の上に参りました。そのうちとうとうはつきり自分が樺の木のとこへ行こうとしているのだということに気が付きました。すると俄かに心持がおどるようになりました。ずいぶんしばらく行かなかつたのだからこによつたら樺の木は自分を待つているのかも知れない、どうもそうらしい、そうだとすれば大へんに気の毒だというような考が強く土神に起つて来しました。土神は草をどしどし踏み胸を踊らせながら大股にあるいて行きました。ところがその強い足なみもいつかよろしてしまい土神はまるで頭から青い色のかなしみを浴びてつつ立たなければなりませんでした。それは狐が来ていたのです。もうすつかり夜でしたが、ぼんやり月のあかりに澱んだ霧の向うから狐の声が聞えて来るのでした。

「ええ、もちろんそうなんです。器械的に対称の法則にばかり叶っているからつて

それで美しいというわけにはいかないんです。それは死んだ美です。」

「全くそうですね。」しずかな樺の木の声がしました。

「ほんとうの美はそんな固定した化石した模型のようなもんじゃないんです。対称の法則に叶うって云ったって実は対称の精神を有^もっているというぐらいのことが望ましいのです。」

「ほんとうにそうだと思いますわ。」樺の木のやさしい声が又しました。土神は今度はまるでべらべらした桃^{もも}いろの火からだ中燃されているようにおもいました。息がせかせかしてほんとうにたまらなくなりました。なにがそんなにおまえを切なくするのか、高^{たか}が樺の木と狐との野原の中でのみじかい会話ではないか、そんなものに心を乱されてそれでもお前は神と云えるか、土神は自分で自分を責めました。狐^{きつね}が又云いました。

「ですから、どの美学の本にもこれくらいのことは論じてあるんです。」

「美学の方の本沢^{たくさん}山おもちですの。」樺の木はたずねました。

「ええ、よけいありませんがまあ日本語と英語と独^{ドイツ}乙語のなら大^{たい}抵^{てい}ありますね。伊^イ太^タ利^リのは新らしいんですがまだ来ないんです。」

「あなたのお書^{しよ}斎^{さい}、まあどんなに立派でしょうね。」

「いいえ、まるでちらばってますよ、それに研究室兼用ですからね、あつちの隅^{すみ}には顕^{けん}微鏡^{きよう}こつちにはロンドンタイムス、大理石のシイザアがころがったりまるつきりごつたごたです。」

「まあ、立派だわねえ、ほんとうに立派だわ。」

ふんと狐の謙遜^{けんそん}のような自慢^{じまん}のような息の音がしてしばらくしいんとなりました。

土神はもう居ても立つても居られませんでした。狐の言っているのを聞くと全く狐の方が自分よりはえらいのです。いやしくも神ではないかと今まで自分で自分に教えていたのが今度はできなくなつたのです。ああつらいつらい、もう飛び出して行って狐を一裂^{ひとさ}きに裂いてやろうか、けれどもそんなことは夢^{ゆめ}にもおれの考えるべきことじゃない、けれどもそのおれというものは何だ結局狐にも劣^{おと}つたもんじやないか、一体おれはどうすればいいのだ、土神は胸をかきむしるようにしてもだえました。

「いつかの望遠鏡まだ来ないんですの。」樺の木がまた言いました。

「ええ、いつかの望遠鏡ですか。まだ来ないんです。なかなか来ないです。欧州^{おうしゅう}航路^{かうろ}は大分混乱してますからね。来たらすぐ持つて来てお目にかけますよ。土星の環^わなんかそれあ美しいんですからね。」

土神は俄に両手で耳を押えて一目散に北の方へ走りしました。だまっていたら自分が何を
 するかわからないのが恐ろしくなつたのです。

まるで一目散に走つて行きました。息がつづかなくなつてばったり倒れたところは三つ
 森山の麓でした。

土神は頭の毛をかきむしりながら草をころげまわりました。それから大声で泣きました。
 その声は時でもない雷のように空へ行つて野原中へ聞えたのです。土神は泣いて泣いて疲
 れてあけ方ぼんやり自分の祠に戻りました。

(五)

そのうちとうとう秋になりました。樺の木はまだまっ青でしたがその辺のいのころぐさ
 はもうすっかり黄金いろの穂を出して風に光りところどころすずらんの実も赤く熟しまし
 た。

あるすきとおるように黄金いろの秋の日土神は大へん上機嫌でした。今年の夏からの
 いろいろなつらい思いが何だかぼうつとみんな立派なもののようなものになつて頭の上に

環になつてかかったように思いました。そしてもうあの不思議に意地の悪い性質もどこかへ行つてしまつて樺の木なども狐きつねと話したいなら話すがいい、両方ともうれしくてはなすのならほんとうにいいことなんだ、今日はそのことを樺の木に云つてやろうと思ひながら土神は心も軽く樺の木の方へ歩いて行きました。

樺の木は遠くからそれを見ていました。

そしてやつぱり心配そうにぶるぶるふるえて待ちました。

土神は進んで行つて気軽に挨拶あいさつしました。

「樺の木さん。お早う。実にいい天気だな。」

「お早うございます。いいお天気でございます。」

「天道てんとうというものはありがたいもんだ。春は赤く夏は白く秋は黄いろく、秋が黄いろになると葡萄ぶどうは紫むらさきになる。実にありがたいもんだ。」

「全くでございます。」

「わしはな、今日は大へんに氣ぶんがいいんだ。今年の夏から実にいろいろつらい目にあったのだがやつと今朝けさからにわかに心持ちが軽くなった。」

樺の木は返事しようとしたがなぜかそれが非常に重苦しいことのように思われて返

事しかねました。

「わしはいまなら誰のためにも命をやる。みみずが死ななけあらんならそれにもわしはかわつてやつていいのだ。」土神は遠くの青いそらを見て云いました。その眼も黒く立派でした。

樺の木は又何とか返事しようとしたがやつぱり何か大へん重苦しくてわずか吐息をつくばかりでした。

そのときです。狐がやつて来たのです。

狐は土神の居るのを見るとはつと顔いろを変えました。けれども戻るわけにも行かず少しふるえながら樺の木の前に進んで来ました。

「樺の木さん、お早う、そちらに居られるのは土神ですね。」狐は赤革の靴をはき茶いろのレーンコートを着てまだ夏帽子をかぶりながら斯う云いました。

「わしは土神だ。いい天気だ。な。」土神はほんとうに明るいい心持で斯う言いました。狐は嫉ましさに顔を青くしながら樺の木に言いました。

「お客さまのお出での所にあがつて失礼いたしました。これはこの間お約束した本です。それから望遠鏡はいつかはれた晩にお目にかけます。さよなら。」

「まあ、ありがとうございます。」と樺の木が言っているうちに狐はもう土神に挨拶もしないでさっさと戻りはじめました。樺の木はさつと青くなつてまた小さくぷりぷり顫ふるいしました。

土神はしばらくの間ただぼんやりと狐を見送つて立っていましたでしたがふと狐の赤革の靴のキラツと草に光るのにびっくりして我に返つたと思ひましたら俄にわかに頭がぐらつとしました。狐がいかにも意地をはつたように肩かたをいからせてぐんぐん向うへ歩いて居るのです。

土神はむらむらつと怒おこりました。顔も物凄ものすごくまつ黒に變つたのです。美学の本達の望遠

鏡だのと、畜生ちくしょう、さあ、どうするか見ろ、といきなり狐のあとを追いかけてました。樺

の木はあわてて枝えだが一ぺんにがたがたふるえ、狐もそのけはいにどうかしたのかと思つて何気なくうしろを見ましたら土神がまるで黒くなつて嵐あらしのように追つて来るのです。さあ狐はさつと顔いろを変え口もまがり風のように走つて遁にげ出しました。

土神はまるでそこら中の草がまつ白な火になつて燃えているように思ひました。青く光つていたそらさえ俄かにガランとまつ暗な穴になつてその底では赤い焰ほのおがどうどう音を立てて燃えると思つたのです。

二人はごうごう鳴つて汽車のように走りしました。

「もうおしまいだ、もうおしまいだ、望遠鏡、望遠鏡、望遠鏡」と狐は一心に頭の隅すみのところで考えながら夢のように走っていました。

向うに小さな赤剥あかはげの丘おかがありました。狐はその下の円い穴にはいるうとしてくるつと一つまわりました。それから首を低くしていきなり中へ飛び込もうとして後あしをちらつとあげたときもう土神はうしろからぱつと飛びかかっていました。と思うと狐はもう土神にからだをねじられて口を尖とがらせて少し笑ったようになつたままぐんにやりと土神の手の上に首を垂れていたのです。

土神はいきなり狐を地べたに投げつけてぐちやぐちや四五へん踏ふみつけました。

それからいきなり狐の穴の中にとび込んで行きました。中はがらんとして暗くただ赤土が奇麗きれいに堅めかためられているばかりでした。土神は大きく口をまげてあけながら少し変な気がして外へ出て来ました。

それからぐつたり横になつている狐の屍骸しかいのレーンコートのかくしの中に手を入れて見ました。そのかくしの中には茶いろなかもがやの穂ほが二本はいつて居ました。土神はさつきからあいていた口をそのまままるで途方とほうもない声で泣き出しました。

その泪なみだは雨のように狐に降り狐はいよいよ首をぐんにやりとしてうすら笑つたようにな

つて死んで居たのです。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1995（平成7）年5月30日11刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年11月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

土神ときつね

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>